地域情報のアーカイブ化と問題点

黒田卓（富山大学人間発達科学部）

地域情報をデジタル化しアーカイブとして蓄積する試みは、以前から注目されているものの、その完成にはかなりの問題をはらんでいる。情報収集、加工の問題、蓄積メディア、配信方法といった技術的側面だけでなく、後世に何を伝えるかといったこの先の利用方法を考えた収集計画立案、収集したデータ保管していく方法、収集活動への理解と協力をどのように得るかといった問題も多く、一筋縄では解決に至らない。

本稿では、これまでの様々な取り組み事例と現在の活用状況について紹介しながら、これらの問題解決への糸口を探る。

1．はじめに

「地域」が消えていく。さまざまなメディアがあふれ、便利で豊かな生活が広がる中で、「地域」の概念が大きく変化してきている。情報メディアが創りだす新たな「地域」観、ネットワークの中に創りだされる新たなコミュニティは、私たちの暮らしのスタイルを大きく変えてきている。比較的「地域」が残っていると思われている富山でも、この変化のうねりは大きく、深く私たちの生活に入り込み、永く気づかれてきた「地域」のつながり、文化を変え始めている。

富山では、県外出身者で他の地域から転入してきた人や来て間もない人のことを「旅の人」とよぶ。筆者も富山にすでに１０年以上住んでいるが、まだまともに富山弁を話すことができない旅の人である。転勤族の親を持つ筆者は、これまでにいくつかの地域で暮らしてきた。旅の人の視点で富山の地域文化を眺めてみると、文化が形成されてきた過程や、さまざまな他の地域とのつながりといった立体的な広がりが感じられる。また、このような地域文化が現在にも受け継がれ、日々の生活の根底に根深くながれていることが感じられることが羨ましく、また現在そこに暮らし、ここで子どもを育てることができることを嬉しく感じている。

しかしながら、この富山に残る地域文化も、少子化や暮らしの変化の影響を受け、急速に消失している。経済危機の煽りを受けて、経済的な問題もその速度を後押ししている。富山には全国から見ても多くの獅子舞が残っていると言われているが、それらを維持している青年団組織自体が存続の危機に見舞われている。すでに舞手がいな

くなり、祭り等で舞われなくなってしまったものも増えてきている。利賀村に残っていた初午とよばれる行事も、その伝承を担っていた小学校の統廃合の影響を受け、村内３地区でそれぞれ伝えられてきたものが､現在では上村地区のみになってしまった。このような無形民俗文化財は、伝承者がいなくなると復元は難しい。残されている記録の多くは個人的なものが多く、再現を目的とした記録ではないため、それらを再現のためにつなぎ合わせることは非常に困難な作業を伴う。

復元までを視野に入れた地域文化伝承を目的とした記録は、単に事を記録するだけでは不足する情報も多い。もちろん、現在一般的に利用できる映像と音声のみでは多くの情報は欠落するが、可能なかぎり復元に近づける情報の収集に取り組む必要があると考える。次章では、筆者がこれまでに関わってきた地域情報のデジタルアーカイブ化の活動の内容と、活動の中で明らかになってきた問題点の事例を紹介する。

2. 地域情報のデジタルアーカイブ事例

2.1 昔語りのデジタルアーカイブ化

各地に残る昔話の語りも、それを語れる人が少なくなってきている。1995 年に、当時、新潟大学教育学部教育実践研究指導センター、長岡技術科学大学計画・経営系、上越教育大学学校教育研究センターの共同研究プロジェクトである新潟インターネット教育利用研究会の活動の一環として、瞽女唄ネットワーク主催「第２回語り尽くし越後の昔話」における語りの収録を行った。本活動は、当時６０歳から９５歳の語り部たちの昔話の語りを、可能なかぎりクリアな映像と音声で収録しようとした試みである。

当時利用できたビデオカメラは Hi8 規格であったが、語りの様子を３台のカメラで収録した。また音声は、MD を利用してデジタル録音を試み、当時としてはかなりの高画質、高音質で記録を行った。

本来語りは、各家庭の中で子どもたちに話をされていたものであり、その様子そのものを収録することはできなかったが、後日、語り部の方の了解を得て、自宅において、語り部自身が語りを聞いていた環境や状況についてインタビューを行い、補完資料として収集も行っている。収録されている映像、音声には、2005 年に 105 歳でこの世を去られた最後の瞽女、重要無形文化財保持者(人間国宝)の生き生きとした語りが記録されている。また、収録した映像と音声を活用し、新潟大学教育学部教育実践研究指導センターにより子ども向けのマルチメディア教材にまとめられた。

本取り組みにおいて、収録等について主催者の瞽女唄ネットワークのご理解とご協力をいただくことができた。このような保存活動は、当事者の方々の理解と協力無しではなりたたない。当事者の方々の活動も当然ながら目的を持ったものであり、本来の目的の邪魔にならず、かつ必要クオリティの情報を集める方法を考えなければならない。

2.2 とやまデジタル映像ライブラリー

富山県映像センターが運用するとやまデジタル映像ライブラリーは、富山県映像センターが所有する県内の様々な映像素材、各種コンテスト等に応募された映像作品等を収集、蓄積し、生涯学習、学校教育等で役立てることを目的として開発された。2011 年 3 月現在、1,543 件の映像が登録されている。

本ライブラリーは、1997 年から 4 年間、放送・通信機構、富山県、（株）富山県総合情報センター、富山県立大学、富山大学の共同プロジェクトとして実施された、「富山県マルチメディア・パイロットモデル事業」によって開発されたシステムをベースとしている。本システムは、教育用映像をデジタル化して蓄積し、インターネットを通じて簡単に遠隔から検索、閲覧ができる。当初のシステムには、登録された動画像のファイル形式を伝送経路の容量に対応した複数の動画形式に自動変換したり、遠隔地から簡単にカット編集、複数動画の結合をおこなったりする機能を有していた。動画像には文書情報を付加することにより、自動的にインデックスを作成し、キーワードで検索ができる機能も有していた。

図 1　当初のとやまデジタル映像ライブラリー

開発が開始された当初のインターネットは、回線容量が小さく、高画質の動画像を配信することは難しい状況であったが、インターネット技術の動向を考慮し、将来ブロードバンド化することを見越して、映像の蓄積は可能なかぎり高画質なもので蓄積できるように設計した。これが功を奏したのか、開発から 10 年以上経過した現在でも当初実験用として蓄積された映像も十分に利用できている。

本システムは現在、富山県映像センターに移管され、蓄積映像の充実、システムの維持管理、改修が行われている。このような実験・研究として開発されたシステムの多くは、せっかくのシステムが完成しても、それらを実験・研究終

図 2　現在のとやまデジタル映像ライブラリー

了後維持管理していくコストが保証されず放置され、システムの老朽化に伴い運用が終了されてしまうのがほとんどである。特に、動画配信の技術の変化は激しく、一度デジタル化した動画データも、それらを継続して利用するためには、動画形式の変換等の作業を定期的に行なっていく必要がある。デジタル化すれば永続的に利用できるような話も一時期各所で話が広がったこともあるが、実際には記憶媒体の変化に応じて、必要な変換処理を続けていかないと、せっかくのデータも再生できないものとなってしまう。

本システムは富山県の理解も得られ、富山県映像センターにおいて定期的な改修作業と継続的な映像の蓄積が行われている。利用者数も安定して推移しているが、利用者の多くは県外からのアクセスで、県内の認知度はまだまだ低いのは残念である。

2.3 富山の手仕事～e-手仕事図鑑～

e-手仕事図鑑は、富山県内の伝統産業、特色ある手仕事をされているかたの仕事の様子、仕事への思いを小・中学生向けのキャリア教育教材として収集、蓄積したアーカイブである。本システムは、子どもゆめ基金の支援を受け、2009 年に富山インターネット市民塾、特定非営利活動法人地域学習プラットフォーム研究会、公益財団法人学習ソフトウェア情報研究センター、富山大学が共同で開発した。2010 年、2011 年に継続して子どもゆめ基金からの支援を得られ、現在、富山、和歌山、高知、徳島、藤沢、尾道、熊本といった各地のインターネット市民塾と協力し、コンテンツの充実を図っている。2011 年 3 月現在、35 のコンテンツが公開されている。

図 3　e-手仕事図鑑

仕事の様子をできるだけ詳しく伝えるために、職人の方の手元をクローズアップした映像を撮影したり、作業を行なったりしている雰囲気なども収録している。

本システムでは、教材コンテンツとして、映像の他に作業の様子をつたえるイラスト

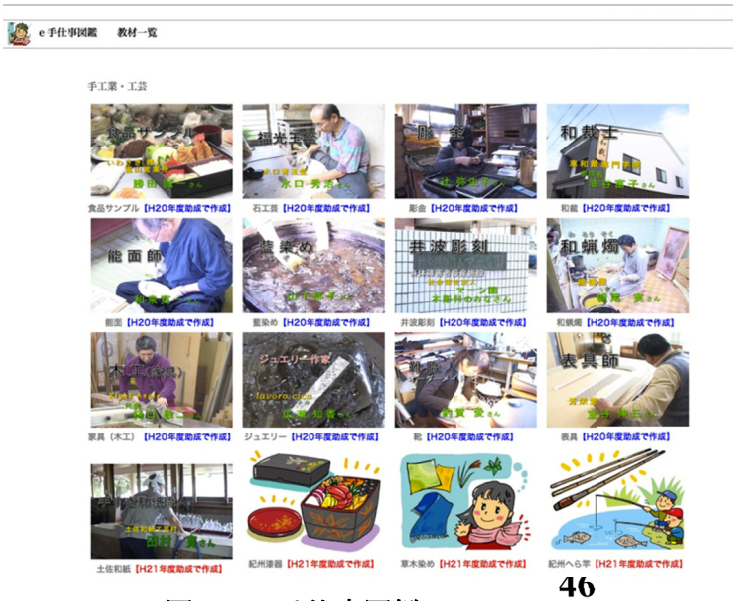

図 4　e-手仕事図鑑コンテンツ

による説明資料､作業の様子を現場音のみで伝える音声コンテンツが用意されている。
また、本システムは基本的な教材コンテンツを手軽に作成できるようにシステムの工夫を行っているだけでなく、これを利用する学習者自身が、自らの活動によって得られた情報を書きこんだり、はなれた地域の学習者から質問、コメントをもらってコミュニケーションをとったりする機能も有している。これにより、正しい情報が蓄積されている図鑑というより、Wikipedia 的な、みんなで作りり上げていく Web2.0 的なコンテンツ収集が可能なシステムになっている。
Wikipedia 的といえども、このようなシステムにコンテンツを集積するためには、活動とのリンクが不可欠である。本システムの利用については、各地で学習プログラムを実施し、そこでの学習成果を蓄積してもらうかたちで、充実を図っている。

3. アーカイブ化に係る問題点と改善策

本章では、前章で紹介した取り組みから、地域情報のアーカイブ化に関する問題点と改善策を検討する。このような問題は、アーカイブの対象や利用目的等のケース毎に大きく変化するが、ここでは、基本的に３つの点に集約して検討する。

地域の理解と協力と収集担当者の事前学習

文化伝統等の保存、継承に関しては多くの関係者が問題として認識されていることが多いが、これらのアーカイブ化にまで想定されていないことが多い。また、関係者内部からの動きは少なく、どうしても外部からの提案となりがちであり、そこで十分なコミュニケーションが取られていない場合、データ収集において問題が発生する可能性がある。
クオリティの高い情報を収集するために収集を実際に担当する人は専門のカメラマン等にお願いするケースも多い。その場合、何を、どのように撮影するのかを明確に伝えないと、意図した情報が収集できないこともある。この作業を円滑に、効果的に実施するためには、収集担当する側の対象に対する事前学習が重要である。また、関係者と収集を実施するカメラマン等の間に立ち、調整を行うコーディネーターとしての能力も求められる。

将来を見越したシステム設計

映像を収録する場合の形式、蓄積、保存する方法等のシステム設計全体において、ある程度先を見越したシステムの設計を行っていく必要がある。具体的な作業を行うためには作業時点で利用できる技術を利用するしか無いが、それらを吟味し、より永続的な利用が可能なもの、もし変換等の必要が出てきた場合にも可能なかぎり対応できる方法で、システム開発、データ収集を行う必要がある。反面、広く普及したものは比較的安価で利用でき、コスト面では有利になることもあり、これらを総合的に見

ながら、どの技術を利用するかを考えていく必要がある。

またほとんどの場合、システム開発については予算的措置が行われるが、それらの運用、保守、改修等にはなかなか予算が付きにくい。運用、保守のしにくい形で導入されると、結果として利用されずに埋もれてしまうことも多い。継続的な予算を確保する努力も重要であるが、開発時にどこまで運用を考えるかが重要である。また、システムは停止しても最低限データは有効活用ができるような設計も必要である。

システム開発を行う際には、同様のシステムがすでに稼動していないかを調査し、検討する必要がある。さきほどのとやまデジタル映像ライブラリーと同様のシステムが、富山県の Web ページにも複数リンクしている。それぞれが別の部所の運用で、とやまデジタル映像ライブラリー運用開始後に構築されたものである。予算的な問題も十分に理解できるが、利用の面から考えると情報が分散してしまい、効果的な利用が可能とは言いにくい。また維持管理にもそれぞれコストがかかり、経済的な面からも問題が残る。なにより運用しながらコンテンツの充実を図っていくことが難しくなる。

維持管理・継続的蓄積のための手当

先にものべたが、１回で集められるデータには限りがある。集めたデータが目的に耐えられない場合は、再収録、再編集といった作業が必要となる。アーカイブ化の事業においておおくは、ある一定期間につくることだけが注視されるが、一番重要なのは、継続運用しながら、データの蓄積への協力者を増やし、蓄積、更新を行っていくことである。また、データの形式変換等のメンテナンス作業も、貴重な情報を永く利用していくために必要な作業である。このあたりも見越した計画が必要である。

4. デジタル・アーキビストの可能性

このような地域情報のデジタルアーカイブ化に従事するスペシャリストとして、デジタル・アーキビストの役割が注目されている。デジタル・アーキビストは、特定非営利活動法人デジタル・アーキビスト資格認定機構が認定する資格であり、文化資料等のデジタル化についての知識と技能を持ち合わせ、文化活動の基礎としての著作権・プライバシーを理解し、総合的な文化情報の収集・管理・保護・活用・創造を担当できる人として活躍が期待されている。

資格は上級デジタル・アーキビスト、デジタル・アーキビスト、準デジタル・アーキビスト・デジタルアーカイブ・コーディネーターといった４つに分かれている。市町村の社会教育主事、博物館の学芸員またそれらを目指す学生等が、実習を含む講習と認定試験に合格することで取得できる。

デジタルアーカイブに関する技術は日々進化しており、本資格の維持には３年毎に更新講習を受講する必要がある。映像収録等の技術では、360 度全周囲撮影や、８方向同時撮影等、文化財や伝統芸能等の保存を目的とした収録に必要となるさまざまな

撮影技術を学ぶ。また、保管技術や検索等に必要となるデータベースやメタデータの付与の方法、著作権や個人情報保護等の法的な問題まで含めた内容になっている。

一部大学では学芸員養成課程に必要な授業を付加し、認定養成機関の認定をうけ、デジタル・アーキビスト養成を実施しているところもある。岐阜女子大学では、文部科学省の現代的教育ニーズ対応推進プログラム、社会人の「学び直し」ニーズに対応する教育プログラムにおいて学生および社会人のためのデジタル・アーキビスト教育プログラムを実施している。

５．おわりに

この原稿を書いている最中に、東北地方太平洋沖地震が発生した。M9.0 という想定をはるかに超える自然の猛威が日々の平穏な生活を突然奪っていった。テレビやインターネットを通じて、被災地の状況が刻一刻と流れてきている。多数の犠牲者もでている。被災された方には心よりお見舞い申し上げるとともに、「地域」の重要性を改めて考えずにはいられなくなった。

個人情報の保護に関する法律が施行された平成１７年頃から、地域の自治会等の名簿が作成されなくなり、どのような人が地域に住んでいるかが分かりにくくなったところも多い。それ以前から、安全性の観点からであろうか、表札等を出さない家も増えてきている。マンションの郵便受けから氏名が消えたのはもう少し前からだろうか。この多くは、法律施行への過剰反応という指摘もある。

安全と利便性はトレードオフの関係にもある。過剰なまでの反応は、バランスを失う。地域住民が日頃からのコミュニケーションの中で、つながりを強めておくことは、決して安全レベルを下げるものではない。先人たちは、地域の祭り、イベントを通して地域のつながりを強めていく事を、意識的、無意識的に伝えてきたのであろう。情報メディアを利用して、個人が手軽に情報を手にすることができるようになり、個人の判断力をより強化していかなければならないが、同時に地域のつながりを維持していくことも大変重要であることは言うまでもない。人から人に伝えられてきたものは一度失うと取り返すことは非常に困難になる。デジタルアーカイブまたデジタルアーカイブをつくる行為が微力でもその一助となることを望みたい。

【参考文献】

- Toyama Just Now No.239-2:全国屈指の獅子舞県・富山、「とやまの獅子舞百選」選定!, とやまブランド 2006 年 03 月 15 日 http://toyama-brand.jp/INT/2006/03/no2392.php
- 利賀の初午, あきの気まぐれな旅　2010 年 1 月 12 日、http://blog.livedoor.jp/akiaki217/archives/51391421.html

- とやまデジタル映像ライブラリー、http://www4.tkc.pref.toyama.jp/video/
- e 手仕事図鑑、http://www.gakujoken.or.jp/teshigoto/index.html
- デジタルアーキビスト資格認定機構、http://npo-jcbda.jp/